

Sさんは、わたしたち夫婦とは親子ほど年齢差のある若い独身女性。店のお客さんで、かつプライベートでも大事な友人でもある。その彼女がひとり旅をするというので、治安や天災が心配になり、老婆心全開になった。

できればハワイ諸島に2週間行くかもしれないという。それを聞いた数日後、南太平洋地域で地震が頻発しているという新聞記事を見つけ、そのあたりは津波の心配があるから、避けたほうがいいと躍起になってアドバイスした。世界地図でハワイ諸島を見ると、芥子粒ほどの点々だもの、津波がきたら、ひとたまりもないよ、あぶない、あぶない。

そのとき、彼女がなんと行ったか！ わたしは、ひっくり返った。

「もし旅先で災害なり事故に遭遇したら、その場所で被災者や被災地にたいして、自分が何ができるかを考えます」

わたしはひっくり返りながら、これがそもそも、Sさんとわたしの決定的な違いだと気づいた。

災害や事故に遭遇したら、自分は当然被災者か被害者になるというのが、恥ずかしいかな、わたしの発想だった。それが普通だと疑わないのは、自分が受け身で生きている証拠だろう。たしかに若いころは、こんなに被害者意識はなかったし、臆病でもなかった。

いつのまにか自分は、社会の中で受け身になり、加害者と対峙するおばさんの体質そのものになっていた。それでいて、けっして可愛らしくびくびくしているわけではない。けっこう図々しく被害者ぶっている。

Sさんのもつ若さ、それは年齢、骨密度、基礎代謝率のような数値ではなさそうだ。だったら、今からでも追いつけるかもしれない。

いつまでも、ひっくり返ったままではいけないから、よっこらしよっと、まずは一息！ ついたところ。